

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 文学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	重松 恵梨
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) Authenticity and Creation of Selves in Defoe's Fictional Autobiographies: Representation of Consciousness in Retrospective Narratives (デフォーの自伝フィクションにおけるオーセンティシティと自己の創造—回想物語の意識描写—)			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		教授	今林 修
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授	大地 真介
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授	宮川 朗子
審査委員 (Name of the Committee Member)		准教授	大野 英志
審査委員 (Name of the Committee Member)		関西外国語大学・元教授	菊池 繁夫
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、英国18世紀初期の文壇を代表するダニエル・デフォーの自伝フィクションにおけるオーセンティシティ(authenticity)と自己の創造のための語りの技巧を物語論的・文体論的視点から分析した論考である。</p> <p>本論文の構成は、「序章」、「本論」(全5章)、「結論」、からなる。</p> <p>「序章」では、オーセンティシティ(「経験を本物らしく描くこと(verisimilitude)」)、そして「物語が実話であると主張すること(truth claim)」の双方が織り込まれた概念)と自己の創造について概説し、本研究の学術的意義を説明する。</p> <p>第一章では、デフォーの自伝フィクションにおけるオーセンティシティの重要性を議論する。従来のデフォー研究では、作中人物の外面の様子を事細かく表すリアリズム(circumstantial realism)に焦点が当てられ、作中人物の内面を表す心理的リアリズム(psychological realism)は軽視される傾向にあったが、デフォーの自伝フィクションにおいては、心理的リアリズムの重要性を指摘する。</p> <p>第二章では、デフォーが好んで使用した語りのスタイル、一人称自伝形式に焦点を当て、自伝フィクションにおける一人称自伝形式とオーセンティシティの関係性を考察する。一人称自伝形式における二つの異なる語りのモード(今の時点から観察者のような視点で「語りながら思い出す(remembering as recounting)」語りのモードと、当時の視点に戻って「追体験しながら思い出す(remembering as reliving)」語りのモード)に着目し、それらがどのようにオーセンティシティを高める効果を発揮しているかを検証する。</p> <p>第三章では、一人称自伝形式を使用することで、デフォーは作品のマクロレベルでオーセンティシティを創り出しているとの前章での主張に加え、作品のミクロレベルでデフォーがいかに物語のオーセンティシティを高めているかを明らかにするために、語りにおける意識描写の技巧について考察する。従来、意識描写を分析する理論的基盤として、話法(speech and thought representation)の枠組みが使用されてきた。しかし、心理学や脳科学で証明されているように、「意識」には、話法で表される「発話」や「思考」といった概念レベルのものだけでなく、「知覚」や「感覚」といった知覚レベルのものも含まれる。知覚レベルの意識を描写する方法も考察することで話法の枠組みを見直し、新たに意識描写(consciousness representation)の枠組みを提唱する。</p> <p>第四章では、デフォーは初期の作品において、描写される経験の集合的な側面を霊的自伝(spiritual autobiography)との関わりから議論し、霊的自伝の枠組みを利用して自己の概念の集合性を描き出していると主張する。</p>			

第五章では、デフォーは後期の作品において、主人公の精神的成長というテーマではなく、主人公の意識に従って物語を構成していく方向に向かったために、語りの中に創り出される自己の概念が、集合的な自己(collective self)から主観的な自己(subjective self)に変化したことを例証する。

「結論」では、オーセンティシティの観点から、従来の話法の枠組みを見直し、新たに意識描写の枠組みを用いてデフォーの自伝フィクションを検証することにより、語りの中に創り出される自己の概念が、集合的な自己から主観的な自己に変化したと結論付ける。

本論文は、描かれる自己の概念を、オーセンティシティを創り出す語りの技巧を通して読み解くことが、デフォーの自伝フィクションのより深い理解に結び付くことを例証し、デフォーの文学研究に新たな見地を示すとともに、語りの技巧の詳細な分析により、物語論と文体論における「語り」の研究に多大に寄与する秀でた論考である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)